



2021 年度 卒業制作解説論文

## 南相馬を辿る

復興再考と記憶の継承

1A182379-1 脇田一平



## 概要

脇田一平

東日本大震災から 2021 年で 10 年が経過した。その年に行われた東京五輪ではコンセプトとして「復興五輪」が掲げられるなど、世間一般のイメージでは「復興」に着々と近づいている様子が見られる。しかし、復興が完全に進んでいるのかと言われると一概に断定できない事実もまた存在する。復興庁が設定した「復興・創生期間」が 2019 年に 10 年間延長されたのだ。被災地の復興状態は、政府の動きからのみでは判断することが難しい。現地では復興の進捗を自らどのように認識しているのだろうか。

上記の疑問を解消できる一つの取材候補地として、福島県南相馬市を想定した。筆者が所属する高橋恭子ゼミでは 2019 年度までゼミ合宿を通して、南相馬市の子供達と映像を制作するプロジェクトが実施されていたためだ。しかし、年月が経つにつれて子供たちは成長し、震災を実際に体験した世代が減少してしまったこともあり、現在はプロジェクトが消滅している。「震災記憶をどう継承するのか」、これもまた被災地が抱えている課題である。

本研究では、ゼミ合宿の繋がりがある南相馬市へ足を運び、現地の方々にインタビューを行い、映像にまとめることで「真の復興とは何か」、「震災の記憶をどう継承すべきか」という二つの課題について解決の糸口を見つけることを目指している。南相馬市には計 2 回訪問し、合計 11 名の方々にインタビューを実施することに成功した。取材を通じて「復興という言葉はあくまで外部の人間が被災地を見る上で使う便宜上のものに過ぎない」、「継承すべきは震災の教訓である」という自分なりの結論を見出すことができた。

## 目次

序章.....	4
1 研究の目的・要旨 .....	4
2 研究の背景 .....	4
3 取材手法・取材対象.....	6
4 全体の構成 .....	7
第1章 OP .....	7
中島穂高氏について .....	7
内容と構成に関するポイント .....	8
震災の記憶をどう残していくのか.....	9
第2章 南相馬市の現状 .....	9
インタビュー紹介 .....	9
行政視点で見る南相馬市の現状と課題 .....	10
みなみそうま復興大学から大学生等フィールドワーク・交流活動支援事業へ .....	12
南相馬市今後の展望 .....	14
第3章 市民が抱く南相馬市の課題.....	15
インタビュー紹介（上野敬幸氏） .....	15
上野氏が感じる福島（南相馬）の課題 .....	15
福島に必要な人とは .....	16
第4章 太田小学校再訪 .....	16
インタビュー紹介 .....	16
子供たちにとっての震災と語り部との出会い .....	17
変容する外部との関わり方 .....	18
第5章 南相馬市を担う人.....	18
インタビュー紹介 .....	18
あすびと福島が目指す経済的持続性と社会的持続性の両立 .....	20

小高区が持つ可能性 次世代育成を目指して .....	21
桜井勝延氏が戦い続ける理由 .....	21
<b>第6章 ED</b> .....	<b>21</b>
インタビュー紹介 .....	22
広島の子供たちが持っているもの .....	22
<b>編集後記</b> .....	<b>23</b>
明らかになった点とテーマに関する考察 .....	23
本作品の課題点 .....	24
おわりに .....	25
<b>参考</b> .....	<b>25</b>



## 序章

### 1 研究の目的・要旨

本研究では東日本大震災から10年が経った2021年において、当時被災した福島県南相馬市の「いま」はどうなっているのか、映像として記録に残し現地の人々を取材することで、真の「復興」とはどのような意味なのか再考していく。また、福島県南相馬市は2019年度まで高橋恭子ゼミのゼミ合宿が行われており、その一環で子供たちと南相馬市の「いま」を記録する作業を行っていた。しかし、年月が経つにつれて震災当時を知る子供達は成長し、現在となっては震災を知らない子供たちが大半を占めるようになった。この現象をきっかけに現在はゼミ合宿のプロジェクトが行われていない。本研究ではもう一つのテーマとして南相馬市が抱える「震災の記憶をどう継承するか」という課題にアプローチすべく、有識者への取材を行い、私自身が感じたことを作品としてまとめていきたい。

### 2 研究の背景

2021年3月11日。日本そして世界中に衝撃を与えた大災害である東日本大震災が起きてから10年が経った。かつて地震・津波そして原子力発電所の事故によって甚大な被害を受けた東北地域はこの10年の年月の間に少しずつ元の姿を取り戻し、新たな一歩を踏み出しつつある。

その集大成として位置づけられていたものこそ、2021年7月23日に開幕した東京オリンピックだ。新型コロナウイルス感染拡大という予測不能な非常事態が起きたことによって、オリンピックの位置付けが「コロナ禍に対する挑戦」という印象が強く出てしまっているが、本来このオリンピックは「復興五輪」として東日本大震災を乗り越えたというイメージを世界に発信するためのものである。事実として復興庁は以下のような要素をオリンピックに組み込むことを明言している。

- ・東日本大震災に際して、世界中から頂いた支援への感謝や、復興しつつある被災地の姿を世界に伝え、国内外の方々に被災地や復興についての理解・共感を深めていただくこと
- ・大会に関連する様々な機会に活用される食材や、競技開催等をきっかけとして来ていただいた被災地の観光地等を通じて、被災地の魅力を国内外の方々に知っていただき、更に被災地で活躍する方々とのつながっていただくことで、大会後も含め「買ってみたい」「行ってみたい」をはじめとする被災地への関心やつながりを深めていただくこと
- ・競技開催や聖火リレー等、被災地の方々に身近に感じていただける取組を通じ

て、被災地の方々を勇気付けること<sup>1</sup>

このように世間的な目から震災を見ると、「復興」というものはかなり進んでいるように感じられるが、現実を見ると一概にそうとは言えないこともまた事実である。復興五輪を提唱している復興庁はもともと「復興・創生期間」と位置付けられている。2021年3月末までに設置期限を終える予定であったが、2019年に期限を10年間延長し、2031年まで存続することが決まっている。NHK（2019）によると、各地の復興の進捗が大きく異なっていることから「地震・津波被災地域は2026年まで」、「原子力被害被災地域は当面2031年までの10年間で本格的な復興・再生に向けた取り組みを行うとしていて、折り返しとなる5年後に、復興施策の進捗状況などを踏まえ、事業の見直しを行う」ことが延長の主な目的であるとされている。国単位で見ても復興への道のりはまだまだ長いのだ。

復興庁設置延長の目的にも10年間のスパンを設けて取り組んでいくことが明言されているように、特に福島原発事故の影響を受けた地域の復興の定義は難しいと言える。街並みが元に戻れば復興なのか、人も戻ってくることが復興なのか、あるいは新たな街づくりを行うことで復興とするのか、明確な定義は存在しない。本研究で取り上げる南相馬市においても同様である。

福島県南相馬市は福島県浜通りの北部に位置しており、現在の人口は58,703人（令和3年4月1日時点）。東日本大震災においては地震・津波による直接死が636人、震災関連死が517人と甚大な被害が及んだ。また、福島第一原発事故の影響も受けており、市内の一部は依然として帰還困難区域に指定されている。<sup>2</sup>

現在の南相馬市では震災に関する記憶をどう繋ぐのかという課題に直面している。実際に高橋恭子ゼミとのプロジェクト概要<sup>3</sup>には南相馬市の課題として「小学5、6年は震災当時、幼児であり、震災の記憶はない。放射能教育も含め、震災関連の情報に接する機会は県外の子供たちより多い。しかし、南相馬市民の一人として地域の被災、復興を考える機会は多くない。家庭や学校で、震災の記憶を風化させないようにすることが必要である。」という点が言及されている。

「復興」というテーマを研究する上でどのようなアプローチを行うべきなのか、そう

---

<sup>1</sup> 復興庁 復興五輪ポータルサイト 2021年8月2日 最終閲覧

<https://www.reconstruction.go.jp/2020portal/reconst-olympic/>

<sup>2</sup> 南相馬市 「東日本大震災とその後 南相馬市の現状と発展に向けた取組」

2022年2月3日 最終閲覧

<https://www.city.minamisoma.lg.jp/material/files/group/57/202109.pdf>

<sup>3</sup> [https://www.city.minamisoma.lg.jp/material/files/group/7/20200625\\_ey5qk.pdf](https://www.city.minamisoma.lg.jp/material/files/group/7/20200625_ey5qk.pdf)

2022年2月6日 最終閲覧

考えた時に一ゼミ生としてこれまでつながりを持っていた南相馬市へ足を運ぶという選択肢が自然と浮かんできた。南相馬市が抱える課題である「震災記憶の風化」は南相馬市のものだけではない、我々学生にとっても継承すべきものである。本研究は南相馬市の課題を解消する足がかりとなるだけでなく、震災を見つめる一学生として作品制作を通して、記憶継承、復興のあるべき姿を発信していきたいと考えている。

### 3 取材手法・取材対象

本研究は映像作品であるため、実際に南相馬市に足を運び手持ちのカメラを用いたインタビュー形式での取材を行った。音声の録音についてはカメラに取り付ける形式のマイクを使用している。

南相馬市には合計2回訪問した。1回目の訪問は2021年10月19日から21日までの2泊3日で、この時は南相馬市の風景を中心とした撮影を行った。以下に1度目で訪問した場所を記しておく。

南相馬市消防・防災センター	万葉風力発電所
南相馬ソーラーアグリパーク（あすびとパーク）	真野川漁港
南相馬博物館	島崎海浜公園
山田神社	真野右田海老太陽光発電所

表1：1回目訪問先一覧

2回目の訪問では実際に取材対象の方へアポイントメントを取り、インタビュー形式での取材を行った。訪問期間は2021年12月4日から8日までである。この際、撮影補助としてサークルの同期で友人の杉浦直希（法学部4年）にも同行してもらった。以下の表は取材を行った人物の一覧である。取材した方の詳細説明については各章にて行う。

名前（敬称略）	職業・肩書き	取材日
中島穂高	日本赤十字社勤務・桜井勝延氏後援会	2021 年 12 月 5 日
桜井勝延	南相馬市前市長	12 月 5 日
半谷栄寿/沖沢真理子	一般社団法人 あすびと福島 代表理事/職員	12 月 4 日/12 月 8 日
上野敬幸	復興浜団代表	12 月 6 日
高田昌幸/北畑晃汰/菅野幸恵	南相馬市立太田小学校 校長/教員	12 月 7 日
和田智行	株式会社小高ワーカーズベース 代表取締役社長	12 月 8 日
石川博之/土井大輝	南相馬市復興企画部イノベーション政策課	12 月 7 日

表 2：取材先一覧

#### 4 全体の構成

計 2 回の訪問によって得られた素材をもとに以下の表のような構成の映像作品を制作した。全体の尺はおよそ 32 分となっている。また、本解説論文は以降、この構成に沿って本編内容と本編で扱いきれなかったが言及しておきたい取材内容について述べていくことにする。

構成タイトル	内容	尺
OP	中島穂高氏 インタビュー	3 分 30 秒
南相馬市の現状	復興企画部イノベーション政策課インタビュー	5 分 30 秒
市民が抱く南相馬市の課題	上野敬之氏 インタビュー	2 分 50 秒
太田小学校再訪	小学校教員へのインタビュー	4 分 20 秒
南相馬市を担う人	半谷氏、和田氏、桜井氏 インタビュー	11 分 15 秒
ED	「復興観」ダイジェスト	4 分 50 秒

表 3：作品構成

### 第 1 章 OP

#### 中島穂高氏について

早稲田大学を卒業しており南相馬市出身。現在は日本赤十字社に勤めている一方、2022 年 1 月末に行われる南相馬市長選挙に向けて、候補者の桜井勝延氏の後援会とい

う立場から桜井氏のインスタグラム運営などの活動も行っている。高橋恭子ゼミに所属はしていなかったものの、在学中に市内で開かれた高橋ゼミの映像上映会に参加したことがきっかけとなり、以降卒業まで毎年ゼミ合宿に参加していた。



画像 1：中島穂高氏（本編より）

### 内容と構成に関するポイント

作品の冒頭を飾る OP（オープニング）は中島氏の震災体験談から始まっている。筆者と世代が近い人物からの経験談を差し込むことで、我々の世代には震災はどう映っていたのか（特に被災者の視点で）という視点を表現することを意識している。また、ゼミ合宿に参加していた経歴を持つ中島氏を冒頭に採用することで、研究の背景にもある「ゼミ合宿と南相馬市の繋がり」を説明するための導入としてもこのインタビューを活用した。

次の場面ではゼミ合宿の DVD インサートを挟んだ後、当時の映像（2018 年度）の一部を流している。この場面にて高橋ゼミでどのような活動が行われていたのかを示し、ナレーションベースで研究の動機を説明している。なお、本作品のナレーションはサークルの同期で友人村田拓真（商学部 4 年）に録音してもらった。

OP の最後では、ゼミ合宿がなくなってしまったことなど、外部の学生と南相馬市のつながりが薄くなってしまっている現状について中島氏が言及しているところを採用した。中島氏が抱えている課題感こそ、研究の背景に通ずる部分であるため、中島氏に代弁してもらっているような構成となっている。その後、BGM に合わせたタイトル出しを行った。



画像 2：タイトル出し

### 震災の記憶をどう残していくのか

本編で採用した中島氏のインタビュー内容は「中島氏の震災体験」と「外部と南相馬市の関わりについて」の 2 点であるが、それ以外にも「震災記憶の継承」について意見を伺うことができた。この点について中島氏は「震災を伝える機会や場所が少ない」ことを課題として指摘している。

南相馬市には震災記憶を伝える公式の場所として、南相馬市消防・防災センター内の震災に関する展示が存在しているものの、双葉町にある「東日本大震災・原子力災害伝承館」のような施設とまではいかない。被害状況がそれぞれ異なる東日本大震災だからこそ、被災地各地にこのような施設を建設することが望ましいのではないかと中島氏は述べていた。また、場所だけでなく機会として学校の「総合学習」の時間を有効活用してほしいといったメッセージを聞くことができた。場所と機会、この 2 点が揃うことで震災記憶の継承効果はより強く発揮する可能性があるのではないだろうか。

## 第 2 章 南相馬市の現状

### インタビュー紹介

OP 後最初場面では南相馬市の現状について行政視点からどの程度復興が進んでいるのかを示すため、南相馬市復興企画部イノベ政策課に勤めている石川博之氏、土井大輝氏の 2 名に話を聞いてきた。石川氏は同課の復興推進係長であり、土井氏は平成 19 年 2 月 19 日に締結された災害時相互援助協定<sup>4</sup>による影響で杉並区から派遣された職員である。

---

<sup>4</sup> 「災害発生時、両自治体が相互に協力し、食料品・生活必需品・医療品等の物的援助及び職員の派遣等人的援助を円滑に行うこと」（杉並区ホームページ 2022）を目的に締結された協定。平成 17 年に旧原町市と締結していたものを平成 19 年に再締結した。





画像 3、4：石川博之氏、土井大輝氏

## 行政視点で見る南相馬市の現状と課題

本編では二人の話から南相馬市の現状についてナレーションベースで示していたが、本解説でも改めてまとめていきたい。

南相馬市では東日本大震災によって地震・津波・原子力発電所の事故が発生し、各災害で甚大な被害が及んだ。人的被害については序章でも触れていたが、表を用いて改めて提示すると以下のような形となる。

### 南相馬市の震災被害

人的被害（令和3年4月1日時点）

<b>死亡</b>	<b>1,156人</b>
（直接死）	636人
（震災関連死）	520人
<b>行方不明</b>	<b>0人</b>
<b>負傷者</b>	<b>59人</b>
重傷者	2人
軽症者	57人

「東日本大震災とその後 南相馬市の現況と発展に向けた取組」より引用

表 4：南相馬市人的被害（本編より引用）

中でも特筆すべきは震災関連死の多さである。津波によって被害を受けた宮城県気仙沼市では死者行方不明者が 1,432 人となっているが、内訳の震災関連死の項目を見ると 109 人（いずれも令和 3 年 10 月 31 日現在）とされており、南相馬市と比較してかなり少ないことが理解できる。南相馬市はこの原因について以下の要素があると指摘している。

- ①南相馬市は、医療施設や介護施設等が比較的多く、地域の中核的な役割を果たしていた。これらの入院患者等を全員避難させることになった。
- ②原発避難や生活環境の変化によるストレス等で、体調の悪化が見られた。
- ③要介護 5、寝たきり状態、高齢者といった本来安静を保つ必要のある人を長時間かけ、長距離移動させたために、結果的に死期を早める原因となったケースが多くあった。<sup>5</sup>

東日本大震災が引き起こした 3 つの災害の影響を直に受けてしまったことがこのような被害状況につながっていると言える。

福島第一原発事故の影響は今現在も残っている。下の図は原発事故によって設定された各種避難区域の変遷である。震災直後の平成 23 年には小高区が警戒区域に、原町区が緊急時避難準備区域に設定された。平成 28 年に避難指示は解除されているものの依然として市の一部は帰還困難区域となっている。

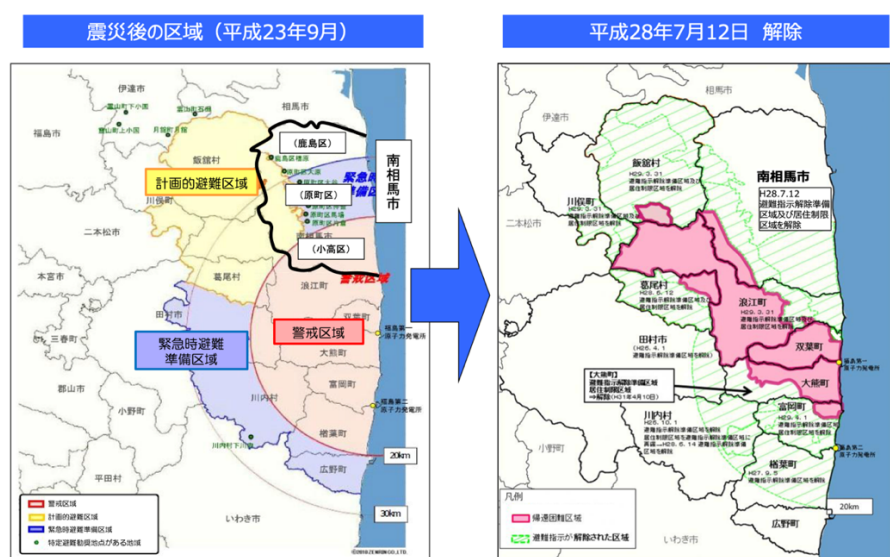


図 1：南相馬市の避難指示区域変遷<sup>6</sup>

<sup>5</sup> 「南相馬市における震災関連死の原因と対策」 2012 年 7 月 12 日

<https://www.reconstruction.go.jp/topics/2-9.teisyutusiryoku.pdf>

2022 年 2 月 6 日最終閲覧

<sup>6</sup> 南相馬市 「東日本大震災とその後 南相馬市の現状と発展に向けた取組」



また、原発事故の影響によって警戒区域に指定された小高区を中心とした人口減少も大きな問題となっている。下の図は南相馬市における震災以降の人口推移を表したものである。警戒区域に設定された小高区では一時期人口が0になってしまっており、避難指示解除後現在に至るまでおよそ3800人まで回復しているものの、震災前と比較すると依然として低い水準になっていることが理解できる。

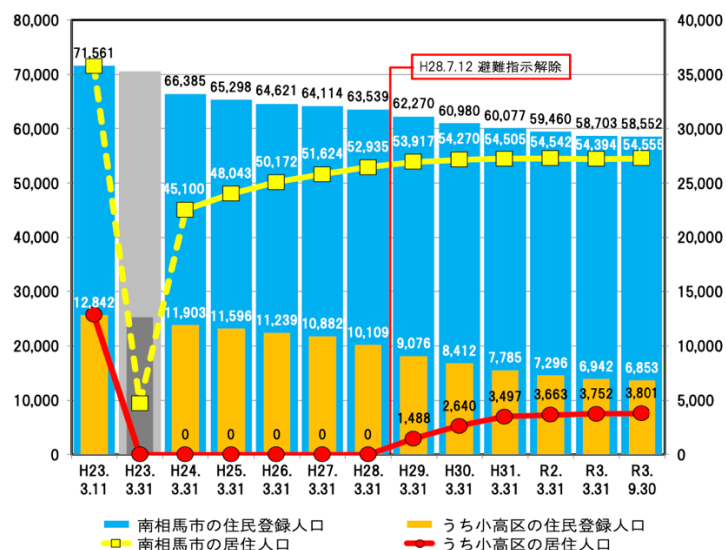


図2：南相馬市における震災以降の人口推移<sup>7</sup>

原発事故の影響が大きい南相馬市であるが、復興に向けた取り組みをする上である一つの要素が大きな障壁になっていると石川氏はインタビューにて言及している。

その要素とは、南相馬市が平成18年に旧小高町、旧原町市、旧鹿島町と合併した比較的新しい市であるということだ。合併から5年が経ち、市としてこれから発展していく段階で原子力発電所の事故が起こってしまったのである。また、その影響により旧市町村帯で避難区分が分かれてしまったことから、各地域で復興に向けて別の政策が必要となり、この点において行政運営が困難になってしまったと述べている。石川氏が「地震津波からの復興は一定程度の目処が立ったが、原発事故に関してはまだまだである」と本編上で言及している背景には上記の問題が存在しているのだ。

### みなみそうま復興大学から大学生等フィールドワーク・交流活動支援事業へ

本編で扱いきれなかったが、インタビューでは土井氏から外部学生と南相馬市の関わりの変遷について聞くことができた。南相馬市では令和3年度以前、「みなみそうま復興大学」という「地域に思いのある住民・企業・団体等の地域の主体と大学等外部の復

<sup>7</sup> 南相馬市 「東日本大震災とその後 南相馬市の現状と発展に向けた取組」

興支援に思いのある人たちが、お互いの活動を知りあうことにより、地域における具体的な活動を共有し、まちづくり・ひとづくりを通じた『地域力』の向上を目指す「大いなる学び(大学)」の場」<sup>8</sup>を提供し、全国の大学と連携したプロジェクトを数多く実施してきた。高橋ゼミのゼミ合宿もみなみそうま復興大学の支援によって実現できたものである。しかし、令和3年度以降より名称が「大学生等フィールドワーク・交流活動支援事業」へと変わり、その支援内容も変化した。そこにはどのような背景があるのだろうか。

みなみそうま復興大学から大学生等フィールドワーク・交流活動支援事業へと名称が変わった際に縮小した支援内容は主に3つある。駅前オフィススペースの撤廃、レンタカーの無料貸し撤廃、そして地域課題解決のための補助金制度の廃止だ。先に挙げた二つの支援内容は利用数が少ないことが理由となり廃止している。重要なのは補助金制度が廃止した背景である。土井氏はこの点について、「これまでは震災からの復興支援という形で外部の学生と連携を取ってきたが、近年その傾向は薄れてきており、南相馬の観光PRや地元の子どもたちの学習支援など学生の活動内容が震災復興からシフトしてきたことが縮小の背景にある」と言及していた。震災から10年が経過している間、徐々に学生と南相馬市の関わり方も変わっていったのだ。

また、みなみそうま復興大学ならびに大学生等フィールドワーク・交流活動支援事業の利用頻度の推移は以下の通りとなる。

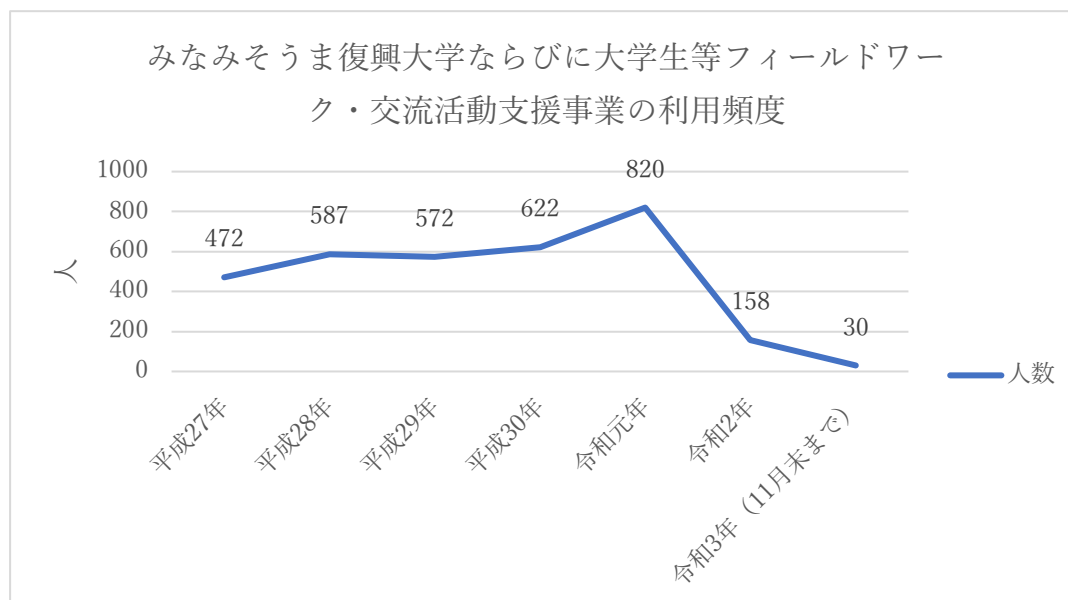


図3：みなみそうま復興大学ならびに大学生等フィールドワーク・交流活動支援事業の利用頻度（土井氏へのインタビューをもとに筆者作成）

<sup>8</sup> 南相馬市「復興大学とは」より

<https://www.city.minamisoma.lg.jp/portal/sections/12/1230/12102/1/1694.html>

2022年2月6日最終閲覧

みなみそうま復興大学自体は平成 26 年度からの制度であるが、本格的に利用され始めたタイミングが平成 27 年度となっているため、グラフには平成 27 年度の人数から反映している。令和 2 年度以降は新型コロナウイルスの影響もあり利用人数がかなり減っているが、それ以前は順調に数を伸ばしていった形跡がある。一方で一番の利点として考えられる補助金（最大 30 万円）制度がなくなってしまったことによる影響が今後どの程度現れるのか、引き続き動向を追っていく必要があると言える。

## 南相馬市今後の展望

本編では少ししか触れられなかったが、南相馬市の今後の展望についてインタビュー内容を踏まえた上でまとめていきたい。

南相馬市では震災以降、復興計画ならびに復興総合計画を何度も改訂しつつ立てている。以下がその変遷である。

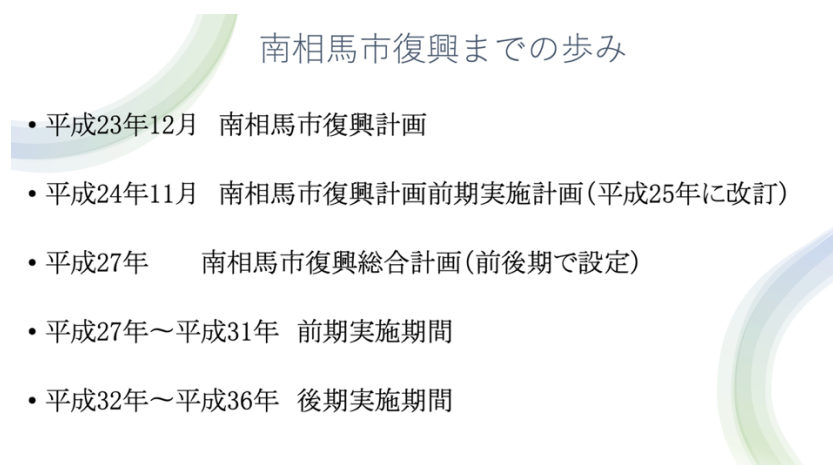


図 4：南相馬市復興までの歩み（本編より引用）

平成 23 年に発表された南相馬市復興計画は、本来合併後新しい市として目指していた市の総合計画に代わって作られたものである。震災以降掲げられた「復興に向けての基本理念と主要施策をまとめた『南相馬市復興ビジョン』」<sup>9</sup>を踏まえ、個別の具体的な取り組み内容が記されている。

その後復興計画は復興総合計画へと改訂され、「本市の未来のあるべき姿と取り組むべきまちづくりの方向性を示した、総合的かつ基本的な指針である最上位計画」<sup>10</sup>として

<sup>9</sup> 南相馬市 「復興計画」

<https://www.city.minamisoma.lg.jp/portal/sections/12/1230/12102/5/1569.html>

2022 年 2 月 6 日最終閲覧

<sup>10</sup> 南相馬市 「東日本大震災とその後 南相馬市の現状と発展に向けた取組」

位置付けられている。現在は前期後期と分かれている総合計画のうち後期にあたる部分を当初の予定を1年前倒した2019年度より実施している。

この後期総合計画では産業活性化と雇用創出を目指す「福島イノベーション・コースト構想」<sup>11</sup>の実施と住まいや地域に対する支援として「移住定住促進」を掲げている。特に原発事故の影響で人口が一時期0人になってしまった小高区に対してのアプローチを重点的に取り組んでいる。

### 第3章 市民が抱く南相馬市の課題

#### インタビュー紹介（上野敬幸氏）

南相馬市原町区在住。震災による津波でご両親と長女の永吏可ちゃん、長男の倅太郎くんを亡くしている。現在はボランティア団体「復興浜団」の代表として活動。東京オリンピックでは聖火ランナーを務めた。2012年から4年間、上野さんに密着したドキュメンタリー映画『Life 生きていく』が2017年に公開された。



画像5：上野敬幸氏（本編より）

#### 上野氏が感じる福島（南相馬）の課題

第3章では行政視点から離れ、実際に被災した市民の方が感じる南相馬市の課題を知るべく、上野氏にインタビューを行った。上野氏が強く発していたメッセージは「震災の教訓をどう残すのか」という点であった。

震災以降も2019年に発生した台風19号など、災害は絶えず南相馬市を襲ってくる。その度に死者が出てしまっている現状に震災の教訓が活かされていないと上野氏は言

---

<sup>11</sup> 福島イノベーション・コースト構想とは、浜通り地域等の産業を回復するために、新たな産業基盤の構築を目指す国家プロジェクト。重点分野として廃炉、ロボット・ドローン、エネルギー・環境・リサイクル、農林水産業、医療関連、航空宇宙の分野におけるプロジェクトの具体化を進めている。

及していた。

東北の人たちは阪神大震災の教訓を活かすことができなかったし、そこで2万人の命が奪われてしまったわけ。それは誰が悪いわけでもないし、自分達が教訓にできなかった。俺にとっては子どもたちを守ることが親の最大の務めで、その子供の命を守ることができなかった。それは全て自分の責任だと思っている。そういった部分での教訓というのは今の日本にどれだけ残っているの？何が伝わっているの？何か行動に移すことをみんなができているの？<sup>12</sup>

上野氏は自分達の経験が後世に残ることを望んでいるわけではない。自分を含めた東日本で起きた悲劇から学べる「教訓」こそ、未来に残すべきであると主張していた。

### 福島に必要な人とは

上野氏ら家族に密着している映画『Life 生きていく』のワンシーンに震災当時東京電力の副社長を務めていた石崎芳行氏が上野氏の自宅を訪問する場面がある。その中で上野氏は石崎氏について「福島に必要な人」と評価していた。

本編では扱いきれなかったものの、この「福島に必要な人」とは一体どういう人なのかという点について実際に話を聞くことができたのでここでまとめていきたい。

上野氏は福島に必要な人について「支援をする上で『自分』が入っている人が嫌い」と発言していた。震災から10年が経過する中で、数多くの人が福島に足を踏み入れ、様々な支援活動を行ってきたが、そのうちの9割はどうしても「自分のため」に活動をしている人がいると上野氏は感じている。自分の利害に関係なく福島に手を差し伸べることができる人こそ、最後まで福島を支えてくれる人であり、そのような人が一人でも増えることを上野氏は願っている。

## 第4章 太田小学校再訪

### インタビュー紹介

南相馬市立太田小学校は高橋ゼミのゼミ合宿時、映像制作プロジェクトを実際に行なっていた小学校である。現在の児童数は45名で震災前のおよそ1/3まで減少している。今回は本研究の2つ目のテーマである「震災記憶の継承」について現在の子供達と向き合っている先生らに話を聞くために訪問した。

インタビューを行った人物は、校長の高田昌幸先生、5年生担任の北畑晃汰先生、そして6年生担任の菅野幸恵先生の3名である。現在の5・6年生は震災当時、産まれた

---

<sup>12</sup> 本編より上野氏のメッセージ抜粋

ばかりの世代であり、彼らにとって震災はどう映っているのかという観点を中心に話を聞くことができた。



画像 6～8：太田小学校の先生方（本編より）

### 子供たちにとっての震災と語り部との出会い

現在の子供達にとって東日本大震災はどう映っているのか。インタビューをしてみる



と、小学校5年生と6年生を担当する先生それぞれから、「実感が湧いていない」という共通の回答が返ってきた。地震の大きく揺れる感覚を覚えていない点や、震災に対する知識が浅いというところがその背景にある。震災から10年が経過した今、こうした現象が起きてしまうことは必然であると考えられる。

筆者が太田小学校を訪問する直前の金曜日に、語り部の佐藤敏郎氏が5・6年生に対して特別講義という形で震災体験を語る授業があった。この時の児童たちの様子は真剣そのものであり、その際、重要なのは震災に触れる機会を得ることであると先生方は感じたようだ。「命に関わることが震災で起きたんだっていうのを、体験と一緒に伝えられる人が必要かなと思います。」北畑先生は本編でこう発言している。

また、上野氏が感じていた福島の問題である教訓の継承について、太田小学校では防災意識という形で還元していることも取材を通して明らかとなった。昨年度のスローガンは「自分で自分を守る」。積極的に避難訓練を行うなど実践的な取り組みがなされていた。

## 変容する外部との関わり方

震災が起きてから10年の間に太田小学校と外部団体との関わり方も大きく変化している。本編では扱いきれなかったが、その変遷についても高田校長先生から聞くことができた。

太田小学校と我々高橋ゼミのような外部団体との関わりが始まったのは震災から2～3年が経過した時である。当時は国道6号線沿いに桜の木を植えるプロジェクトや、子供達と芸術作品を作る活動、花火を打ち上げる活動など積極的な交流がされていた。しかし、時間が経つにつれてそのような機会も減少。高田先生が太田小学校に赴任した令和元年以降、高橋ゼミの撮影を最後に外部との交流は無くなってしまった。

一方、太田小学校では現在、「地域との交流」に力を入れている。震災によって途絶えてしまった地域連携を復活させるべく、地域と合同で開催する運動会や田植え活動、積極的なシニアの訪問など、その活動は多岐に渡っている。外部の団体と目指した復興への取り組みから、かつての繋がりを取り戻す地域との取り組みへ子供たちが触れ合う人々も徐々に変化しているのだ。

## 第5章 南相馬市を担う人

### インタビュー紹介

第5章では南相馬市における復興活動の最前線にいる人物3名のインタビューを順に取り上げている。各個人が南相馬市においてどのような役割を担っているのか、あるいはなぜそのような活動を行なっているのかという点について取材を行った。

### ◎半谷栄寿氏

一般社団法人あすびと福島代表理事。南相馬市出身であり、2010年6月まで東京電力の執行役員を務めていた経歴をもつ。

あすびと福島では次世代を担う若者に対して再生可能エネルギーを活用した体験学習を提供しており、未来を切り拓く「あすびと」の育成を目指している。



画像 9：半谷栄寿氏（本編より）

### ◎和田智行氏

株式会社小高ワークスベース代表取締役社長。南相馬市出身。中央大学卒業後、ITベンチャー企業への就職を経て、2005年に小高区へUターンした。震災直後は一時期県外などで避難生活を行っていたが、小高区に再び戻り、「地域の100の課題から100のビジネスを創出する」をモットーとした株式会社小高ワークスベースを立ち上げる。小高区を拠点に起業家に対するコワーキングスペースの提供や起業家誘致、女性が働ける環境を目指したガラス工房経営など今小高区に必要なサービスを提供し続けている。



画像 10：和田智行氏（本編より）

### ◎桜井勝延氏

南相馬市前市長。震災当時、原発から20キロ～30キロ圏内に南相馬市が位置してい



たことから、南相馬には立ち入りできないというイメージが先行してしまい支援物資が届かない状況に陥るも、YouTube で支援を求める声を世界に発信。世界中からの援助につながった。上記の功績から米誌タイムの「世界で最も影響力のある 100 人」に選出された。2022 年 1 月末の南相馬市長選挙に立候補するなど現在も精力的な活動を行っている。



画像 11：桜井勝延氏（本編より）

### あすびと福島が目指す経済的持続性と社会的持続性の両立

一般社団法人あすびと福島では半谷氏の紹介でも述べたように、再生可能エネルギーを活用した体験学習を、小学生から大学生まで各カテゴリーに合わせた形式でそれぞれ提供している。あすびと福島発足当時は南相馬市と連携して、広大な敷地に 500kW の太陽光発電所設備が建設されていたが、2019 年の台風 19 号の影響もあり現在は廃止。次世代育成に専念した形式で運営を行なっている。

あすびと福島で提供されている子供たちに対するプロジェクトの活動費は支援という形で無償化している。加えて学生たちには交通費も支給するなどサポートも手厚い。なぜこのような形式で体験学習を提供できるのだろうか。

半谷氏は「経済的持続性と社会的持続性の両立」を達成することで上記のサポートを行うことができると取材の中で言及している。ここで言う社会的持続性とは上記のような支援を行うことで継続的に子供たちに学んでもらうことを指す。

一方経済的持続性とは子供たちに無償で体験学習を提供するための、ビジネスモデルを確立することを意味するキーワードである。あすびと福島では体験学習の他に一般企業に対して研修プログラムを有償で提供している。半谷氏によると、2013 年にあすびとパーク（旧ソーラー・アグリパーク）ができて以降 8 年間で、およそ 6000 人もの社会人が研修制度を利用したそうだ。社会人に対して有償のサービスを提供し、子供たちにその利益を還元する。この循環を継続させることで「あすびと」の育成が絶えず可能

となるのだ。

### 小高区が持つ可能性 次世代育成を目指して

震災による原発事故の影響によって一時期人口が0人になってしまった小高区。その中で和田氏は小高区を、どのような街になるか予測できない、可能性に満ちた「フロンティア」と捉え、人物紹介にて記載したような多岐にわたるビジネスを小高区で展開している。

本編では扱いきれなかったが、小高区を拠点としたビジネスの他に和田氏は次世代を担う若手の育成にも力を入れている。ソフトバンクやヤフーなどがサポート企業として名を連ねる「Next Action → Social Academia」<sup>13</sup>だ。和田氏はこのプロジェクトを運営する一般社団法人パイオニズムの代表理事でもある。「この地域を自立した地域」にするために、ビジネス、そして人材育成の面においても小高区を拠点に挑戦をし続けているのだ。

### 桜井勝延氏が戦い続ける理由

南相馬の復興を再考する上で桜井氏の功績はなくてはならないものであると言える。高橋恭子ゼミのゼミ合宿で一度取材する機会があった点や、後援会活動を行なっている中島氏の協力もあり、今回のインタビューが実現した。

震災から10年が経過している現在においても2022年1月の南相馬市長選挙に立候補するなど精力的に活動をしている桜井氏。なぜ復興の最前線で常に戦い続けることができたのだろうか。本編では桜井氏が戦い続ける理由について取材した内容を取り上げた。

本編では簡単にしか触れることができなかったが、桜井氏が市長を務めていた当時残した印象的な功績にYouTubeを利用した世界への支援物資の呼びかけが挙げられる。この経緯についても桜井氏は一貫して「命を守る」ための行動であったとインタビュー内で言及していた。

「今の南相馬市をそのままにしておくわけにはいかない」、市長であった時期も現在も桜井氏の原動力はこの発言に集約されている。2022年1月末の市長選挙では惜しくも現職の門馬和夫氏に敗れてしまったが、桜井氏の挑戦は今後も続いていくだろう。

## 第6章 ED

---

<sup>13</sup> 一度は人口ゼロとなった福島県南相馬市小高区から、新しい価値創造につながる事業を立ち上げるプロジェクト。「Apollo」「Rocket」「Booster」の3クラスがあり、各クラスの参加者が協力しながら「ムーンショット」（これまでにない挑戦という意）を目指している。

→小高パイオニアヴィレッジ公式ホームページ 2022年2月6日最終閲覧  
<https://village.pionism.or.jp/news/20210310/>

## インタビュー紹介

第6章のED部分ではBGMを挿入し、インタビューした方の「復興観」をダイジェストでまとめている。その中であすびと福島職員の沖沢氏が初めて登場するため、本章で紹介していく。なお、復興観のダイジェストに関する考察は編集後記にて記すことにする。

### ◎沖沢真理子氏

あすびと福島職員。2018年度に行われた太田小学校との映像制作プロジェクトであすびとパークを訪れた際に出演していた。元小学校事務職員で震災をきっかけに現在の職場へ転職している。現在はあすびと福島で提供している子供達に向けた体験学習の構成を考える業務を中心に行っている。



画像 12：沖沢真理子氏（本編より）

## 広島の子供たちが持っているもの

本編では取り上げることができなかったが、沖沢氏へのインタビューの中で印象的だった瞬間に、彼女の娘が2014年に（当時中学生）、広島県へ行った際のエピソードがある。沖沢氏の娘が広島県に行った際、現地の幼稚園生と交流する機会があり、その中で幼稚園の子供達に「8月6日って何の日か知っている？」といった質問をされたそう。この経験を娘から聞いた沖沢氏は衝撃を受けたという。広島の子供たちは絵本などを通じて幼少期からかつての悲劇を認識する習慣が整っている一方で、福島記憶はその段階に達していないと沖沢氏は指摘している。「子供たちの身近なところから3月11日がどういう日だったのかを伝え続けたいと思います。」インタビューの最後、沖沢氏はこう発言していた。

経験という形で東日本大震災の記憶を継承することはもう二度とできない以上、その記憶との接点を絶えず構築することが求められている。震災から10年が経過し、子供たちの記憶のベースが「経験」から移行してきた今だからこそ、伝え方も変化していく必要があるのだと取材を通して考えることができた。

## 編集後記

### 明らかになった点とテーマに関する考察

今回の作品制作では序章で示した課題感をもとに、「真の復興とは一体何か」、「震災の記憶をどう継承するか」の2点について、様々な方に取材を行い一つの形としてまとめ上げを試みている。その集大成がエンディング部分の南相馬市民が抱える「復興観」のダイジェストである。ここでは編集後記として、二つのテーマについて明らかになった点と考察を記していきたい。

#### ◎真の復興とは

取材をしていく中でより強く感じたことではあるが、「復興」という価値観は被災地である南相馬市に住む人々の中でもかなりばらつきがあった。「心の復興が真の復興」、「人口がもとに戻ることが復興の一つの指標になる」、「人は戻らなくとも、その人が幸せに暮らすことができていればそれは復興である」などその価値観は多岐にわたっている。特にソフト面（精神面）での復興に関しては個人の捉え方に大きく左右されてしまうこともあり、追求しきれないのではないだろうか。下手に復興という言葉进行定義づけることは、個々人の復興観のうち一部を否定することに繋がり、結果として未来へ進むことを妨げしまうように感じた。

一方、南相馬市民がこの10年を振り返って上で「一度被害を受けた以上、完全にもとに戻ることにはできない」という共通認識を持っていることも知ることができた。もとに戻らないのであれば別の道で前に進み、前よりもより良い状態に発展していく。東日本大震災という「事実」を受け入れ、前に進んでいく覚悟を南相馬市民は持っていた。各個人が行っている取り組みの内容は異なるが、「南相馬をより良くしていきたい」という信念が南相馬市民を突き動かしているのではないだろうか。

この「復興観」のダイジェストを制作する上でインタビューする方全てに「復興とは何ですか」というような質問を共通して行ったのだが、この質問をするたびに取材の場の雰囲気が一気に変わったことを覚えている。南相馬の方々はその後、言葉を詰まらせ、絞り出すように自身の復興観を語っていた。価値観が結果としてバラバラだったのも、何より南相馬の人々自身が「復興」について、明確な定義づけができていないわけではなかったからなのではないだろうか。ただあるのは「南相馬市を良くしていきたい」という信念のみ。それが「復興」につながるのかどうかという点はあまり重要ではないのだ。

「復興」という言葉はあくまでも筆者のような外部の人間が被災地を「過去」と「現在」を見る上で使う便利な言葉に過ぎない。これが取材を通じてたどり着いた筆者なりの「復興」という言葉に対する解釈である。震災に誰よりも向き合いその地で生活する南相馬の方々が、ただ「南相馬市をより良くしたい」という信念のもと活動しているの

であれば、外部の人間は南相馬市民が描く「未来」を後押しするような行動をするべきなのではないだろうか。

### ◎震災の記憶をどう継承するか

受け継ぐべきは震災への教訓である。これが取材を通じてたどり着いた筆者なりの結論である。特に上野氏のインタビューや太田小学校の取材を通じてこのことを強く感じた。上野氏がインタビュー内で「自分の家族が亡くなったとかそういう事実が後世に残って欲しいわけではない」と発言していたことがかなり印象に残っている。今、過去を嘆いたところで起こった事実は変わらない。残すべきはこの悲劇を2度と繰り返さないための「教訓」であるというメッセージを上野氏は取材中何度も口にしていった。

学校の場合においても「教訓」を残すための教育が重要である。先生方は共通して「今の子供達は震災に対する実感が無い」と発言していた。語り部の方が講演を行うなど何かしら特別な体験ができなければ今後も子供達に対して震災を「自分ごと」として認識させることは難しいのだ。「今ある命をどう守るのか」、この点に対する知識を、過去の事実を理解することで養っていく行動が今後必要になってくると考えられる。

### 本作品の課題点

本研究では32分にわたって南相馬市民に対するインタビューをまとめた映像を制作したが、その中で主な課題が3点見つかったので以下に記していきたい。

#### ・構成が決まりきっていない中で取材が始まってしまった

取材を行う前、もちろんアポイントメント等の準備は行なっていたものの、最後まで構成をしっかり固めないまま12月の本取材に臨んでしまった。取材の中で出会った方に次の取材先を紹介していただくなど多くの協力があつて11名という人数を取材することができたのだが、その分全員分のインタビューをまとめることに大変苦勞した。また、急遽取材が増えることもしばしばあり、その分準備期間が少なくなってしまった。事前に取材する方を決め切っていればより精度の高い、濃い取材が可能となっていたと考えている。

#### ・人物の動きが少なかった

映像の中身に関する反省であるが、今回南相馬を訪れた際、インタビュー部分の人物画は撮影していたものの、それ以外の部分でインタビューの画を撮影しなかったことが課題として挙げられる。この行為を怠ったことで、表現がインタビュー映像かインサートの2種類という単調なものになってしまった。取材対象を絞り密着という形で複数日撮影することで構成のマンネリを防ぐ手法を取っても良かったのではないかと感じている。

### ・細かいコンセプト設定

今回の研究は全体的にテーマが抽象的すぎた。その結果として取材対象の膨大化が起きてしまったと考えている。筆者自身の「復興」に対する認識が甘かったのもあり、より踏み込んだ取材を行うことができなかった。今回掲げたテーマを踏まえ、より細かい次元でのコンセプト設定を行うことができれば、作品としてのクオリティを上げることができたと考えている。

## おわりに

個人的な話になってしまうのだが、東日本大震災当時筆者は家族の都合上、海外で生活をしていた。当然被災経験はしておらず、地元である千葉県浦安市が液状化の被害を受けていたことについても知っていいものの、当事者意識を持っていたわけではなかった。「いつしかは震災と向き合わないといけない」という思いを心の片隅にずっと置いておいたまま10年が経過してしまったのだ。

高橋恭子ゼミと南相馬市の縁を知れたことは自分にとって転機となり、今回の卒業制作を行うきっかけにもなった。その上で数多くの方々への取材を通して自分自身の震災に対する考え方が大きく変化した。真の意味で「貴重な経験」だったといえる。

被災地は常に未来へと動き続けている。その動きに対して自分ができることをこれからも探していきたい。この作品を通じて少しでも被災地や未来と向き合う時間が視聴者に提供できていれば幸いである。

## 参考

・復興庁 復興五輪ポータルサイト 2021年8月2日 最終閲覧

<https://www.reconstruction.go.jp/2020portal/reconst-olympic/>

・高橋恭子ゼミ 南相馬市（2019年）「映像で記録する南相馬の過去と現在～大学生と小学生との協働を中心に」

[https://www.city.minamisoma.lg.jp/material/files/group/7/20200625\\_ey5qk.pdf](https://www.city.minamisoma.lg.jp/material/files/group/7/20200625_ey5qk.pdf)

2022年2月6日最終閲覧

・南相馬市 2021年 「東日本大震災とその後 南相馬市の現状と発展に向けた取組」

2022年2月3日 最終閲覧

<https://www.city.minamisoma.lg.jp/material/files/group/57/202109.pdf>

・NHK 政治マガジン 2019 年 11 月 6 日 「復興庁 2031 年まで存続へ 設置期限 10 年延長」 2021 年 8 月 2 日 最終閲覧

<https://www.nhk.or.jp/politics/articles/lastweek/25427.html>

・南相馬市 2020 年「映像で記録する南相馬の過去と現在～大学生と小学生との協働を中心に」 2021 年 8 月 2 日 最終閲覧

[https://www.city.minamisoma.lg.jp/material/files/group/7/20200625\\_ey5qk.pdf](https://www.city.minamisoma.lg.jp/material/files/group/7/20200625_ey5qk.pdf)

・NHK スペシャルとして 2018 年 3 月 11 日『シリーズ東日本大震災 目指した“復興”はいま… ～震災 7 年 被災地からの問いかけ～』 2021 年 8 月 2 日 最終閲覧  
作品は NHK オンデマンドで視聴

<https://www6.nhk.or.jp/special/detail/index.html?aid=20180311>

・杉並区ホームページ 2022 年「南相馬市」

2022 年 2 月 6 日最終閲覧

<https://www.city.suginami.tokyo.jp/suginamishoukai/tsudou/kouryu/1005487.html>

・「南相馬市における震災関連死の原因と対策」 2012 年 7 月 12 日

<https://www.reconstruction.go.jp/topics/2-9.teisyutusiryoku.pdf>

2022 年 2 月 6 日最終閲覧

・南相馬市「復興大学とは」

<https://www.city.minamisoma.lg.jp/portal/sections/12/1230/12102/1/1694.html>

2022 年 2 月 6 日最終閲覧

・南相馬市 「復興計画」

<https://www.city.minamisoma.lg.jp/portal/sections/12/1230/12102/5/1569.html>

2022 年 2 月 6 日最終閲覧

・小高パイオニアヴィレッジ公式ホームページ

<https://village.pionism.or.jp/news/20210310/>

2022 年 2 月 6 日最終閲覧

・あすびと福島公式ホームページ

<https://asubito.or.jp>

2022 年 2 月 11 日最終閲覧

・笠井千晶, 2017, 『Life 生きてゆく』, Rain field Production